

第百八十九話 危険を顧みず、敵兵を救助！

第百六十九話で「戦場の武士道精神」と題して、ラバウル攻略作戦における日豪軍のエピソードを紹介したが、「大東亜戦争における日本軍の武士道精神」と題する記事を発見した。<http://www.goyuren.jp/kokumin-no-rekisi/column-69.pdf> A4にして3ページの分量を簡単に紹介しよう。

1 マレー沖海戦における日本海軍航空隊

大艦巨砲から航空主兵への先鞭をつけ、英首相チャーチルをして絶句せしめたとされるマレー沖海戦（1941（S16）年12月10日）における日本海軍航空隊の無用な殺生を回避した美談である。

英東洋艦隊旗艦プリンス・オブ・ウェールズは巡洋戦艦レパルス、駆逐艦3隻を伴いシンガポール港を出撃した。英艦隊を捕捉した日本軍は、最新鋭の一式陸攻を含む85機を出撃させて、英艦隊に波状攻撃を敢行した。

海軍航空隊の第6次攻撃でレパルスが沈み、プリンス・オブ・ウェールズも沈没に瀕したと見るや、第7次、第8次攻撃隊はこれに止めを刺さず、残存の駆逐艦3隻を見逃して、溺者救助に当たさせた。そして、爆弾は域外に棄て、旋回して帰還した。

翌日、その海域に慰霊の花束2つを投じた。1つは戦死した日本軍人の霊のため、他のもう1つは戦いに敗れた英国軍人の霊に対してであった。因みに、2艦の戦死者は840人、救助されたものが2081人であったという。英国駆逐艦の艦長は、「我々は攻撃を受けなかった。救助の妨害も受けなかった。敵の攻撃機は戦艦の上を航過しなかった」と証言した。

2 日本海軍駆逐艦「雷」による決死の敵兵救助（引用）



『昭和17年3月1日、スラバヤ沖海戦で日本海軍に撃沈された英国海軍艦艇2隻の乗組員422名を、翌3月2日「雷」（1,680トン、乗員220名・艦長工藤俊作中佐）が救助します。この海面は、敵潜水艦の存在も考えられる海域であったにもかかわらず、艦長の命により、浮遊する敵将兵全員の救助に当たり、重油にまみれた将兵の服を脱がせてその身体を丁寧に洗浄し、さらに艦に搭載されている被服と食料を提供して労わりました。その後、イギリス士官だけを集め、工藤艦長は士官たちに敬礼をした後に「諸官は勇敢に戦われた。諸官は日本海軍の名誉あるゲストである」と英語で話されました。この工藤艦長の言葉に、イギリス士官たちは心から感銘を受けたといわれます。この士官達の中にサムエル・フォール卿・元英国海軍少尉（英国駆逐艦・エンカウンター乗員）がいました。彼がのちに世界にこの詳細を伝えることとなります。このことは数年前まで日本の誰も知らなかった事実ですが、惠隆乃介氏の著書である平成17年刊行の「敵兵を救助せよ！」（草思社刊）によって、その全貌が明らかになりました。』

『いつ敵からの攻撃を受けるかもしれない危険な海域の中で、救助活動をすることがどれだけ危険か、・・・工藤艦長の「救助！」の命により、「雷」の乗組員たちは、イギリス将兵を救助するため、ロープや縄梯子などを投げ入れ・・・パニック状態・・・イギリス士官が号令をかけると、全員が一瞬で秩序を取り戻し・・・重傷者は、「雷」の近くまで泳ぎながらも力尽きて沈み、・・・日本兵は「頑張れ！」と涙を流し・・・たまりかねた1人の日本人水兵は、命令違反を覚悟で海中に飛び込み、沈んでいくイギリス水兵を支えてはロープを巻きつけ始めました。次々飛び込む日本兵。・・・（以下略）』

- * 日本人は今なお脈々として武士道精神を堅持していると信じる。戦場という極限の中にあっても健全なる武士道精神を発揮し得る日本人は何と素晴らしいのだろう。まだまだ知られざる戦場の美談はある筈だ。

（第百八十九話 了）